

「夫婦する」行動の3つの次元

松 田 智 子

〔抄 録〕

本研究の目的は、「夫婦する」行動の構造を明らかにし、「夫婦する」行動が夫婦関係にどのような影響を与えているのかを明らかにすることである。「夫婦する」行動とは、夫婦が情緒的絆を確認するために「～する」行動として特徴づけることができる。

まず、「夫婦する」行動の構造を明らかにするために因子分析を行った。その結果「コミュニケーション行動」「性的行動」「生活共同行動」の3つの因子が析出された。次に性別役割分業意識と「夫婦する」行動の3因子との関連を調べたところ、妻においてのみ「コミュニケーション行動」との間に正の相関が確認された。さらに、「夫婦する」行動の3因子と夫婦関係満足度との関連を分析したところ、「夫婦する」行動が夫婦関係満足度に及ぼす影響は夫と妻で異なることが明らかとなった。

キーワード：「夫婦する」行動、コミュニケーション行動、性的行動、生活共同行動、夫婦関係満足度

I. はじめに

近代家族のメルクマールのひとつは、家族成員が強い情緒的絆によって結ばれているということである。⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾ このことは、家族が情緒的満足を得る愛情体験の場であるという実態よりは、むしろ家族には「愛情がなければならない」といった規範として要請されていることを意味しているといえよう。近年の社会史や家族史の知見によれば、夫婦や親子の情緒的絆を重視する家族意識は、必ずしも普遍的に存在していたのではなく、近代にいたる社会変動のなかで形成されたことが明らかにされている。ショーター (Shorter, E) は、伝統的家族から近代家族への変容過程を「家族心性」の変化を通して明らかにしているが、例えば夫婦間のロマンティック・ラブは、近代になって現れた心性のひとつである。伝統社会では婚姻は家系や家産を重視して親族や共同体のなかで決定されるのが一般的であったが、近代家族にあつては、夫婦の結

びつきはロマンテック・ラブに変わり、夫婦は互いに愛しい人格的で私的な性愛の感情によって結ばれることが理念となった。⁽²⁾ また、ストーン（Stone, L）はイギリスにおける前近代から現代に至る家族変動を描いているが、今日の欧米社会で最も見なれた、馴染みの深い家族は、1640年から1800年に登場した家族類型を原型としており、その特徴は家族成員が強い情緒的絆によって結ばれ、家族内のプライバシーが強く保たれていたことを明らかにしている。⁽³⁾

日本の状況に目を転じると、このような愛情にもとづく近代家族が大衆レベルで一般化したのは、戦後特に高度経済成長期以降のことである。この時期、勤労者層が労働者人口の半数以上を占めるようになり、夫婦と子どもを生活単位とする核家族が増加した。恋愛結婚が見合い結婚を上回り、規範レベルでも「夫婦家族制イデオロギー」が定着した。家族は「団らん」の場や「安らぎの場」として、公的領域からの避難所という性格を強め、家族成員間の情緒的な結びつきを重視する意識が強まっていったのである。

今日、愛情が感じられない家族は家族らしくないという感覚は、多くの人びとが共有するものだろう。山田昌弘の「主観的家族像」⁽⁴⁾や上野千鶴子の「ファミリー・アイデンティティ」⁽⁵⁾の調査においても、現在生活している人びとが「家族であるかどうか」を意識するときの基準となっているのは、一緒に住んでいることや法律的关系の有無よりも、愛情関係の有無であることが明らかになっている。また、坂本佳鶴恵は、なぜ家庭内離婚は「離婚」なのかをてがかりにして、家族とは「家族的親密さ」によって特徴づけられるものであり、それは印象操作のない、くつろいだ行為のやりとりによってもたらされることを示している。⁽⁶⁾

しかし、家族の愛情が規範化され、情緒的絆が重視されると、家族はまた動揺しやすい不安定性も抱えることになる。情緒とは元来うつろいやすい不安定な性格をもっているからである。山田昌弘は、近代家族の情緒性について精力的に研究を行っているひとりであるが、彼は愛情に価値をおいた家族関係は不安定になりがちであり、その不安定性を回避するために、家族においては愛情を確認できる「～する」行動が要求されるようになると指摘している。このことは例えば、夫婦や子どもが接触できる機会をつくり団らんや年中行事（誕生日、結婚記念日、レジャー活動等）を演出するといった現象にも象徴的に現れているが、今日の家族においては、情緒的絆の証をもとめて「～する」行動を互いに要求する傾向が強まっているといえよう。⁽⁷⁾⁽⁸⁾

夫婦の情緒関係に目をむけてみると、高度経済成長期に庶民層が近代家族に移行した時期には、夫が収入を得、妻が家事や育児をするというだけで、大多数の家族は情緒的満足を得ていたと考えられる。しかしながら、近年の「熟年離婚」といった中高年夫婦の離婚の増加が示すように、夫婦関係においては、愛情に対する解釈に変化が生じてきており、これまでのように夫婦がそれぞれの家庭内役割を果たすだけでは、愛情を実感しにくくなっている。例えば、仕事にコミットする夫に対して、かつては「家族への愛情のために、一生懸命仕事をしている夫」という解釈が優勢であったのが、今日ではむしろ「家族とのコミュニケーションをとらない、愛情のない夫」という解釈に変わりつつある。また、家庭内の役割分担を果たすことを愛

情と解釈する意識が崩れつつあるなか、新たに愛情を意味付与できる行動が求められるが、しかしそれにかわる愛情の生成規則が確立されていないのが現状であり、そのことが、今日の夫婦における情緒的不满や葛藤を生じさせる要因の1つになっているといえよう。⁹¹⁰⁸

本稿では、以上のような家族の情緒性をめぐる状況を踏まえて、夫と妻が具体的にどのような行動によって、夫婦の情緒的な結びつきを確認しているのか、特に中高年夫婦に焦点をあて明らかにしていく。今日の中高年夫婦は、長いエンプティ・ネスト期の出現によって夫婦だけの期間が長くなり、いやがおうでも夫婦が向きあわざるを得ない状況にある。彼らの一般的なライフコースをたどってみると、その多くが大正末から昭和初期に生まれ、戦後の混乱期に結婚をし、その後の高度経済成長を支えた世代である。特に夫は、ひたすら仕事に精をだし、家族や地域との関係にあまり目を向けてこなかった世代である。一方、妻はそうした夫を支えながら家庭役割を懸命に果たしてきた世代であるが、性別役割分業がもたらす夫婦のコミュニケーション不全といった問題に敏感に反応してきた世代でもあるという点に留意が必要であろう。

本稿では、「夫婦する」行動を分析における中心的な概念として用いる。「夫婦する」行動とは、夫婦関係や情緒的絆を確認するために「～する」行動として特徴づけることができる。本稿の具体的な課題は、まず(1)中高年夫婦の「夫婦する」行動の構造を明らかにし、次に(2)「夫婦する」行動に影響を与える要因を明らかにするとともに、(3)「夫婦する」行動が、夫婦関係にどのような影響を与えているのか、夫婦関係満足度との関連を明らかにすることである。

Ⅱ. 方 法

1. 調査方法

本研究で使用するデータは、「中高年の夫婦関係とソーシャル・ネットワークに関する調査研究」から得られたものである。調査は、平成8年11月に兵庫県内の5つの市区町に居住する60歳以上75歳未満の男性およびその配偶者を対象に実施した。調査対象者の選定は、各市区町の選挙人名簿からの無作為抽出により、大正11年生まれの男性およびその配偶者をそれぞれの地点ごとに250カップルずつ、合計1250カップル(2500名)を抽出した。

郵送法による質問紙調査の結果、夫婦そろって回答があったのは496カップル(992名)、回収率は39.7%であった。

2. 分析対象者の属性

本稿において分析対象となるのは、夫婦そろって回答のあった夫と妻の個人である。分析対象者の主な属性は表1に示すとおりである。

「夫婦する」行動の3つの次元（松田智子）

表1 調査対象者の基本属性

（夫：N=496 妻：N=496）

〈夫の年齢〉		〈妻の年齢〉	
59～65歳	43.8%	49～62歳	49.0%
66～74歳	56.3%	63～74歳	51.0%
〈夫の学歴〉		〈妻の学歴〉	
小・中学校	35.9%	小・中学校	34.1%
高等学校	38.3%	高等学校	49.4%
大学	21.4%	大学	13.1%
無回答	4.4%	無回答	3.4%
〈夫の就労状況〉		〈妻の就労状況〉	
有職	54.5%	有職	28.8%
無職	45.5%	無職	71.2%
〈年間世帯収入額〉		〈世帯構成〉	
200万円未満	10.7%	夫婦のみ世帯	58.5%
200～400万円未満	42.1%	核家族世帯	25.6%
400～600万円未満	24.0%	拡大家族世帯	15.9%
600～800万円未満	9.5%		
800～1000万円未満	4.6%		
1000万円以上	7.1%		
無回答	2.0%		

対象者の平均年齢は、夫 66.2 歳、妻 62.5 歳である。学歴は、夫、妻ともに高卒の比率が最も高くなっているが、しかし大卒の比率をみると夫では約 2 割、妻では 1 割強と、この世代としては高学歴層がやや多くなっている。就労状況については、無職の比率は夫では 4 割強であるが、妻では約 7 割と高くなっている。また、世帯構成では、中高年期はライフステージ上、子どもの排出期にあるため、夫婦のみ世帯の比率が約 6 割を占めている。世帯収入については、200 ～ 400 万円が最も多く、また全体の約 8 割が 600 万円未満となっている。

Ⅲ. 結 果

1. 「夫婦する」行動の構造

まず、中高年夫婦の「夫婦する」行動がどのような構造をもっているのか下位尺度の構成を明らかにするために、因子分析を行った。具体的には「悩みや心配事を話しあう」「喜びを分

かちあう」「その日の出来事を話しあう」「配偶者に好意を伝える」「配偶者にありのままをみせる」「いっしょに外出する」「趣味をいっしょに楽しむ」「身体を寄せあう」「同じ部屋で寝る」「食事をともにする」「テレビをいっしょにみる」の11項目について、「いつも」に4点、「ときどき」に3点、「たまに」に2点、「まったくない」に1点を与えて得点化し、主成分分析を行った。表2がバリマックス回転後の結果であり、3因子が析出された。また、各因子においては、いずれの項目も0.4以上の負荷を示しており、3因子の固有値寄与率は59.4%であった。

それぞれの因子は、「夫婦する」行動のどのような次元を表しているのだろうか。まず第1因子をみてみると、「悩みや心配ごとを話しあう」「喜びを分かちあう」「その日の出来事を話しあう」等の項目と高い相関を示している。これらの項目は、出来事や体験を伝える情報交換のコミュニケーションや悩みの相談や自己開示といった情緒的なコミュニケーションを示す因子である。したがって第1因子は「コミュニケーション行動」の因子と解釈することができる。

一方、第2因子は、「身体を寄せあう」と「同じ部屋で寝る」の2項目と高い相関を示している。これらの項目は配偶者に対する身体的な接触や交流を示す因子である。したがって第2因子は「性的行動」の因子と解釈することができよう。

第3因子は、「食事をともにする」と「テレビをいっしょにみる」の2項目と高い相関を示しており、これらの項目は夫婦の日常生活における活動の共同性をあらわしている。したがって第3因子は「生活共同行動」の因子と解釈することができる。なお、3つの下位尺度のCrombachの α 係数をもとめたところ、「コミュニケーション行動」は.83（平均点20.66、標準偏差1.83）、「性的行動」は.54（平均点5.11、標準偏差1.83、 α .54）、「生活共同行動」は.58（平均点7.41、標準偏差.95）であった。

以上のように因子分析の結果、「夫婦する」行動には、「コミュニケーション行動」「性的行動」「生活共同行動」といった3つの異なる次元があり、それぞれが独立していることが明らかとなった。したがって、次に重要な課題は「夫婦する」行動の3つの次元それぞれが、夫婦関係とどう関連しているかをさぐることである。ではまず、「夫婦する」行動の3つの因子と属性がどう関連しているのか、検討してみよう。

2. 属性との関連

ここで取り上げる属性は、性別（＝夫妻別）、年齢、学歴、就労状況である。分析には、「コミュニケーション行動」「性的行動」「生活共同行動」の3因子の因子得点をそれぞれ算出し、T検定と一元配置分散分析を行った。まず、性別による影響をみるためにT検定を行った結果、「夫婦する」行動の3因子のうち、いずれの因子も夫と妻との間に統計的に有意な差はみられなかった。すなわち「コミュニケーション行動」「性的行動」「生活共同行動」のいずれにおいても、夫婦のどちらかがより多く行っているということは確認されなかった。

表2 「夫婦する」行動の主成分分析（バリマックス回転後）

N=992

	第1因子	第2因子	第3因子	共通性	平均値	標準偏差
①悩みや心配ごとを話しあう	<u>.802</u>	.098	.206	.696	3.27	.88
②喜びを分かちあう	<u>.797</u>	.138	.259	.722	3.45	.81
③その日の出来事を話しあう	<u>.763</u>	.025	.357	.710	3.45	.77
④配偶者に好意を伝える	<u>.561</u>	.382	-.208	.504	2.10	.97
⑤配偶者にありのままをみせる	<u>.559</u>	.112	.021	.325	3.24	1.03
⑥いっしょに外出する	<u>.558</u>	.287	.269	.467	2.94	.85
⑦趣味をいっしょに楽しむ	<u>.493</u>	.490	.053	.485	2.18	1.02
⑧身体を寄せあう	.193	<u>.793</u>	-.006	.669	1.89	.95
⑨同じ部屋で寝る	.024	<u>.718</u>	.357	.643	3.23	1.25
⑩食事をともにする	.110	.036	<u>.800</u>	.654	3.90	.39
⑪テレビをいっしょにみる	.283	.189	<u>.733</u>	.653	3.51	.71
固有値	4.27	1.18	1.08			
寄与率（％）	.388	.107	.098	.594		

（注1）「いつも」に4点、「ときどき」に3点、「たまに」に2点、「まったく」に1点を与え得点化した。したがって、点数が高いほど頻度が多いことを示している。

一方、性別以外の属性については、それぞれを独立変数として一元配置分散分析を行った。その結果が表3である。まず、「コミュニケーション行動」についてみると、夫、妻ともに、年齢、学歴、就労状況のいずれとも関連はみられず、属性は「コミュニケーション行動」に影響を与えていないことが明らかとなった。

また、「性的行動」と属性との関連をみると、夫、妻ともに年齢と就労状況の影響がみられ、夫、妻ともに年齢の若い方が「性的行動」をより多く行っていた。また就労状況の影響では、夫、妻ともに、無職よりも有職の者が「性的行動」がより多い傾向が認められたが、就労状況は年齢との相関が高いため、これは年齢の影響であると解釈できる。

さらに、「生活共同行動」をみると、夫のみに学歴の影響がみられ、学歴の低い層ほど「生活共同行動」をより多く行っていた。しかしながら、妻においては属性と「生活共同行動」との間に統計的に有意な関連はみられなかった。

3. 愛情規範意識と性別役割分業意識との関連

本稿における愛情規範意識とは、夫婦間の愛情を重視する意識であり、具体的には「強い愛情がなければ、夫婦とはいえない」というものである。一方、性別役割分業意識は「男性が外で働き、女性は内で家事をするのが望ましい」であり、いずれの項目も、「そう思う」「ややそ

表3 「夫婦する」行動の3次元と属性との関連 (1元配置分散分析)

	自由度	第1因子 (コミュニケーション行動)	第2因子 (性的行動)	第3因子 (生活共同行動)
〈夫〉				
年齢	1	3.508	17.312***	.191
学歴	2	.708	2.344	4.309*
就労状況	1	1.339	13.147***	.015
〈妻〉				
年齢	1	.988	8.712**	2.378
学歴	2	1.010	1.280	.619
就労状況	1	.001	4.183*	1.309

(注1) 自由度を除いた数字の値はF値を示している。

(注2) ***P<.001 **P<.01 *P<.05

う思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4件法でたずねた。

まず、夫と妻の愛情規範意識および性別役割分業意識の実態をみておこう。「強い愛情がなければ、夫婦とはいえない」に関しては、夫では7割強、妻では8割強が肯定していた。一方、性別役割分業意識については、夫では7割強、妻では5割強が肯定的な回答をしていた。愛情規範意識、性別役割分業意識いずれも、夫、妻ともに肯定する割合は高いものの、夫と妻を比較すると、妻よりも夫の割合が高く、強い愛情規範意識と性別役割分業意識をもつ夫の姿が浮き彫りとなっている。

次に、愛情規範意識および性別役割分業意識と「夫婦する」行動の3因子との関連をみてみよう。それぞれの意識項目と各因子の因子得点との相関分析を行った結果が表4である。愛情規範意識は、夫、妻の両方において「コミュニケーション行動」「性的行動」「生活共同行動」のすべての因子と統計的に有意な正の相関を示した。すなわち、夫、妻ともに愛情規範意識が強い者ほど、「コミュニケーション行動」「性的行動」「生活共同行動」をより多く行う傾向がみられた。

一方、性別役割分業意識は、妻においてのみ「コミュニケーション行動」因子と統計的に有意な正の相関を示しており、性別役割分業意識の強い者ほど、「コミュニケーション」行動をより多く行っていた。しかし、夫においては、性別役割分業意識は、いずれの因子とも統計的に有意な関連は認められなかった。

4. 夫婦関係満足度に及ぼす影響

「夫婦する」行動の3因子が夫婦関係満足度に与える影響を明らかにするために、夫と妻、

表4 「夫婦する」行動の3次元と愛情規範・性別役割分業意識との関連（相関係数）

	第1因子 (コミュニケーション行動)	第2因子 (性的行動)	第3因子 (生活共同行動)
〈夫〉			
愛情規範意識	.303 **	.182 **	.204 *
性別役割分業意識	.039	-.024	-.086
〈妻〉			
愛情規範意識	.323 **	.138 *	.153 **
性別役割分業意識	.139 *	.060	.048

(注1) 標記の数字は、相関係数を示している。

(注2) **P<.01 *P<.05

それぞれの夫婦関係満足度を従属変数とする重回帰分析を行った。従属変数として用いた夫婦関係満足度は、「現在の夫婦関係に満足している」について「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の4件法で測定したものである。夫と妻の夫婦関係満足度を比較すると「あてはまる」の回答は夫54.9%、妻39.8%と、妻よりも夫の満足度の方が高くなっていた。

一方、独立変数としては年齢、学歴、就労状況、愛情規範意識、性別役割分業意識、「コミュニケーション行動」「性的行動」「生活共同行動」を用いた。これらの独立変数のうち、「夫婦する」行動の3因子以外の変数は、コントロール変数として用いた。また、属性である年齢、学歴、就労状況はダミー変数によって表した。年齢については、夫は「59～65歳」に1、「66～74歳」に0、妻は「49～62歳」に1、「63～74歳」に0を与えた。また学歴については夫、妻ともに「高等学校・大学」に1、「小・中学校」に0を与え、さらに就労状況については、「有職」に1、「無職」に0を与えた。

重回帰分析の結果は表5に示すとおりである。夫では、「夫婦する」行動の3つの因子はいずれも、夫婦満足度に対して統計的に有意な正の影響を有しており、「コミュニケーション行動」「性的行動」「生活共同行動」をより多く行っている者ほど、夫婦関係満足度が高くなっていた。一方、妻では「夫婦する」行動の3因子のうち、「コミュニケーション行動」のみが、夫婦満足度に対して有意な正の影響を及ぼしていた。

以上の分析から、「夫婦する」行動の3つの因子が夫婦関係満足度に及ぼす影響は夫と妻で異なり、ズレがみられることが明らかとなった。すなわち、夫においては、「夫婦する」行動の3因子はいずれも夫婦関係満足度を高めるのに対して、妻においては、「コミュニケーション行動」だけが夫婦関係満足度を高めていたのである。

なお、コントロール変数として用いた変数のなかで、夫、妻ともに愛情規範意識が夫婦関係

表5 重回帰分析による夫婦関係満足度に対する「夫婦する」行動の影響

独立変数	標準回帰係数	
	夫	妻
コミュニケーション行動	.344 ***	.458 ***
性的行動	.147 **	.080
生活共同行動	.130 **	.070
愛情規範意識	.103 *	.102 *
性別役割分業意識	.028	-.047
年齢 (→低)	.012	.019
学歴 (→高)	.172 ***	.014
就労状況 (→有職)	.044	-.013
重相関係数 (R)	.576	.566
修正決定係数 (R ²)	.319	.305

(注) *** $P < .001$ ** $P < .01$ * $P < .05$

満足度に統計的に有意な正の影響を及ぼしており、愛情規範意識が強い者ほど、夫婦関係満足度が高くなっていた。また、夫では「学歴」も統計的に有意な影響を及ぼしており、学歴の高い人ほど、夫婦関係満足度が高くなっていた。

Ⅳ. 考 察

本稿の分析結果から注目されるのは第一に、愛情規範意識、性別役割分業意識という2つの規範意識と「夫婦する」行動との関連についてである。まず、愛情規範意識は、夫、妻の両方において「コミュニケーション行動」「性的行動」「生活共同行動」のすべての因子と正の相関を示した。この結果は、「強い愛情がなければ、夫婦とはいえない」といった規範レベルでの愛情意識と、実態レベルでの「夫婦する」行動とが結びついており、夫婦関係に対する情緒的期待や価値付与が強いほど、コミュニケーション行動、性的行動、生活共同行動が促進されることを示唆している。

一方、性別役割分業意識と「夫婦する」行動との関係に関しては、妻においてのみ「コミュニケーション行動」との関連が確認された。すなわち、性別役割分業規範意識がより強い妻ほど、「コミュニケーション行動」をより多く行っていた。なぜ、妻だけに、性別役割分業規範意識と「コミュニケーション行動」との関連がみられるのだろうか。

近代家族のもうひとつのメルクマールである性別役割分業の下では、夫には道具的な役割、妻には表出的な役割が振り分けられている。表出的役割とは、家庭内の心理的な緊張を緩和し

て情緒的安定や統合を支える役割であるが、これは本稿で用いた「コミュニケーション行動」と親和的である。というのは、表出的役割を遂行するには出来事を伝えあう情報交換や互いの精神面を理解し支えあうといったコミュニケーション行動が不可欠であるからである。

対面的なコミュニケーション行動は本来、双方向的な相互作用であろう。しかし、2者関係においては、コミュニケーション行動は不均等に配分される傾向があり、コミュニケーションの「与え手」と「受け手」という2つの固定的な立場を生じさせやすい。特に性別分業型の夫婦関係においては夫に道具的役割、妻に表出的役割という振り分けによってコミュニケーション行動においてより能動的な妻と、より受動的な夫という関係を生じさせやすいといえる。妻のみに、性別役割分業意識とコミュニケーション行動と関連がみられたという調査結果は、妻の性別役割分業を肯定する意識が強いほど、表出的役割に対するコミットメントが強まり、コミュニケーション行動が活発化することを示唆しているが、ここには、性別役割分業型の夫婦関係におけるコミュニケーション行動の非対称性という問題が関与していることは重要である。

第二に分析結果から注目されるは、「夫婦する」行動の下位尺度と夫婦関係満足度との関連に関する点である。夫では、「夫婦する」行動の3因子はいずれも、夫婦満足度に対して正の影響を有したのに対して、妻では「夫婦する」行動の3因子のうち、「コミュニケーション行動」のみが、夫婦満足度に対して正の影響を及ぼしていた。こうした夫婦のズレはなぜ生じるのだろうか。

まず、「夫婦する」行動の3つの次元が、夫婦関係のどのような側面をあらわしているかを検討しておこう。大和礼子は、核家族世帯の妻を対象に調査をした結果、夫婦間の情緒行動は、会話行動と感情表出行動の2つに分かれることを明らかにしている。さらに会話行動を儀礼的な「円満志向」関係を反映した行動として、また、感情表出行動を異性間の共感を確認する「個人的感情志向」関係を反映した行動として整理している。この類型にしたがって、「夫婦する」行動の3次元を検討してみると、まず、コミュニケーション行動は互いの内面を理解し支えあうという情緒的交流を表しており、これは大和のいう夫婦間の共感を志向した感情表出行動といえよう。また「生活共同行動」は夫婦の日常生活における活動の共同性を表しているという点で、関係性の円満を志向した儀礼的な行動といえる。一方、性的行動は、夫婦間の身体的な接触や交流を示しており、感情表出行動の側面と儀礼的な行動の側面の両方をもっていると考えられる。

勿論、性別行動や生活共同行動においてもコミュニケーションしないということはある。また、情緒的なコミュニケーション行動から生まれてくる感情と、生活の共同といった儀礼的な行動から生まれてくる感情とはそれほど隔たったものではない。むしろこれらが混在するなかで日常の夫婦生活は営れているといえよう。しかし、コミュニケーション行動と儀礼的な共同行動が乖離することも多い。何故なら、儀礼的な生活共同行動はコミュニケーション行動と比較すると、深い共感を必要とせず、比較的関与しやすく、またコミュニケーション行動

がなくても続けることが可能だからである。¹¹²

夫婦においては、コミュニケーション行動、性的行動、生活共同行動いずれも、夫婦関係や情緒的絆を確認するために用いられる。しかし、このような「夫婦する」行動の3つの次元は、夫婦関係のそれぞれ異なる側面を反映しており、夫婦の親密な関係を維持する上でどのような意味をもつのか、その重要性のウエイトは夫婦間で異なっている。特に、妻にとって親密な関係を維持するためにクリティカルとなるのは、深い共感関係を必要とするコミュニケーション行動であり、儀礼的な性的行動や生活共同行動ではない。ここに、コミュニケーション行動だけでなく儀礼的な行動も一様に夫婦関係満足度を高めていくという夫との間にズレが生じているのである。

V. おわりに

本稿の目的は、中高年夫婦に焦点をあて、夫と妻がどのような行動によって結びつきを確認しているのかを明らかにすることであった。その結果、「夫婦する」行動には「コミュニケーション行動」「性的行動」「生活共同行動」という3つの異なる次元があることが明らかとなった。また、性別役割分業意識と「夫婦する」行動の3次元との関連を調べたところ、妻においてのみ「コミュニケーション行動」との間に正の相関が確認された。さらに、「夫婦する」行動の3因子と夫婦関係満足度との関連を分析したところ、「夫婦する」行動が満足度に及ぼす影響は夫と妻で異なっていた。

これらの分析結果から示唆されるのは、夫婦の情緒関係におけるコミュニケーション行動の重要性と夫妻間における非対称性である。すなわち、そこには、夫婦が実際に行うコミュニケーション行動は、夫・妻ともに夫婦関係を確認する上で重要であるものの、夫婦関係の現状に満足しがちで、コミュニケーション行動においても受け身的な夫と、愛情関係に敏感で、夫婦のコミュニケーション行動を通して、積極的に「夫婦」しようとする妻という夫婦像が浮かび上がってくる。こうした夫と妻のズレは、今日の中高年期の夫婦問題の一因ともなっているが、このズレを縮小する鍵となるのは、中高年男性のより能動的なコミュニケーション行動であるといえよう。

ギデンズ (Giddens, A) は、「近代家族」形成の契機となるロマンティック・ラブが性差にもとづく権力関係を内包していることを指摘している。そして、今後の夫婦関係が性的にも感情的にも対等な「純粋な関係性」へと変容していく可能性を予見している。¹¹³ 夫婦の情緒的関係の重要性は今後さらに増していくことが考えられる。性別役割分業型夫婦における情緒性やコミュニケーション行動の非対称性を十分に認識したうえで、より対等なコミュニケーション行動を通して中高年期の夫婦関係を再構築していくことが重要であると思われる。

付 記

本稿で用いたデータは、コープこうべ生協研究機構の依託、助成をうけて実施した「中高年の夫婦関係とソーシャル・ネットワークに関する調査研究」から得られたものである。コープこうべ生協研究機構ならびに共同研究者である杉井潤子、玉里恵美子の両氏にお礼を申し上げる。

注

- (1) Aries, P. 1960 *L'enfant et la vie familiale sous l'ancien regime* = 1980 杉山光信・恵美子訳『〈子供〉の誕生』みすず書房。
- (2) Shorter, E. 1975 *The Making of the Modern Family* = 1987 田中他訳『近代家族の形成』昭和堂。
- (3) Stone, L. 1977 *The Family, Sex, and Marriage in England, 1500-1800* = 1991 北本正章訳『家族・性・結婚の社会史 1500～1800年のイギリス』勁草書房。
- (4) 山田昌弘 1994 『近代家族のゆくえ』新曜社。
- (5) 上野千鶴子 1994 『近代家族の成立と終焉』岩波書店。
- (6) 坂本佳鶴恵 1991 「家族らしさ」吉田民人編『社会学の理論でとく現代のしくみ』新曜社。
- (7) 中野収 1992 『「家族する」家族』有斐閣。
- (8) 井上忠司+サントリー不易流行研究所 1993 『現代家庭の年中行事（講談社現代新書）』講談社。
- (9) 山田昌弘 1992 「アメリカの離婚」有地亨・老川寛編『離婚の比較社会史』三省堂：113－118。
- (10) 宮坂靖子 1997 「夫婦の関係－結婚の脱制度化『現代家族の社会学』有斐閣ブックス：110－125。
- (11) Parsons, T&R. F. Bales. 1956 *Family* = 1981 橋爪貞雄他訳『家族』黎明書房。
- (12) 大和礼子 1990 「〈選べる〉関係と〈選べない〉関係」『家族研究年報』16：35－50。
- (13) Giddens, A. 1992 *The Transformation of intimacy: Sexuality, Love and Eroticism* = 1995 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容－近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』両立書房。

（まつだ ともこ 応用社会学科）

1999年10月15日受理